I love bicycle ,the bicycle in my life!

所長相手にオレの片言英語の独演会が今始まろうとしていた。タンザニアの大都市アルーシャにあるキリマンジャロ国立 ンジャロ国立公園管理事務所の一室で事務

ているはずであった。 九十二年十一月九日 マンジャロ 山頂手前のギボハット (四七〇三 m) (土) のことである。 十一月九日といえば当初の予定では、 の山小屋でベ ッドに疲れた体を横たえ もうキ

オレの人生の中でこんな経験は初めてであった。 マンジャロへ L かし今オレはキリ の自転車持ち込み許可を得るべく必死で交渉しているのであった。 マンジャロから離れること西へ約百五十キロの街アルー シ ヤでキリ

そしてその場にい とりあえず覚えた英文は全て言った。あとは、必要な言葉を何度も繰り返すのみだ。 はちきれんばかりの気持ちとは裏腹に昨日覚えた英文を間違えずに言うのに必死であ ていた。 た所長の秘書らしき黒人男性は、 オレの言葉をひとつひとつうなずきな った。

のである。 が前日泊まったモシという町のホテルに、たまたま日本人夫婦が泊まってい

そのことを知ったオレは迷わず彼等の部屋に駆けこんだ。

信したからでだった。 というのは、『こんな田舎のホテルに何泊もしているということは英語は完璧だろう』

する。 自分の部屋に戻ったオレは彼等と三時間程考え抜いた英文を何度も何度も読み返

ノー!

と同時に日本にいる友達の顔が頭に浮かぶ。 その瞬間フー、と気が遠くなる。 「どうしても自転車の持ち込み許可は出せない」これが所長の答えであった。 顔、頭の血が引いていくのを、 はっきりと感じる。

も言わずに歩いてくれた・ た友、そして十四時間にもおよぶ六甲縦走トレーニングに同行してくれた犬塚君、辻中君、 ここアフリカに出発する前、壮行会で成功を祈ってくれた仲間、 大きなマメを作り足をひきずりながらもあの宝塚までの長い下り坂を何 手を振り見送ってくれ

そんな記憶がよみがえってくる。

時間が過ぎただろう。ふと、我に戻る。 たんな色々な想いが頭の中を回り狂う、どのくらいなんだ。このままでは、帰れない。日本に戻れない。 こまで来たんだ。今回オレにとっては、全てが冒険 の『人生』を見つめ直すため、すべてを賭けこからの『人生』を見つめ直すため、すべてを賭けこ

はなかったのである。そして、しかし、所長の頭は決して縦に振られる事

ある。
た、夢にまで見たキリマンジャロへの出発の日できた。夢にまで見たキリマンジャロへの出発の日がやって

か思い出したりして・ でも気分はもうタンザニアのオネー -ちゃん \sim いやキリマンジャロへ



マラングゲートでは MTB 持ち込み許可が下りず 150km 離れた アルーシャまで足を運ぶことに・・・。

にリッチな気分になってしまうのは、 貧乏人の証なのか。

それも自費で空を飛ぶなんてことは初めてなので、

変

国際線に乗るのはなんと十年ぶり、

大きなウエスト ヤツに半パン、 -バック、 満タンに入ったザックを背負い少し汚れた軽登山靴、 こんな格好じや誰もリッチマン (笑) には見てくれない カメラの 入 0 た

りしてい 「でもオレは今から独りでキリマンジャロに行くんだぞ」なんて心の中でいきがっ るのである。 てい

11 つも気持ちのい 十年ぶりに乗っ いものである。 た国際線は、 予定通り午前十時に成田を出 発 飛行機が 飛 び立 0 瞬 間 は

手に決め付けて二杯、三杯と喉を潤す。 機内での飲食は無料ということもあり、 う んア ル コ ル はワ 1 ンに限るな』 なんて勝

そんな感じで五時間の飛行時間も気にならず香港に到着。

実は今回タンザニアまでの間、 トランジットが三回もあるの だ。 その __ 回目がここ香港で

-ランジ ット手続きも無事済ませてボンベイ行きに搭乗、 途中バ ン コクを経由 予定

九時過ぎであった。 よりかなり遅れてボンベイに、 着 1 たの は午後

飛行機会社もキャセイ航空からエチオピア航空 ここで二回目のトランジット -となる。 そし 7

荷物の行方が心配となってくる。 すると聞いた事があったからである。 何回もト このあたりから成田で預けた MTB ランジットがあると預けた荷物 \mathcal{O} が紛失 入 0 た

パスポートの入ったウエストバッグが気になり きないし、 当然ロビー なので、この空港内で一夜を過ごす事に。 時間程仮眠できたかどうか ここボンベ 三十五リットル の椅子相手では、横になることもで イか ら飛行機に乗るのは明朝 のザックとカメラ、 九 時



キリマンジャロもこのスタイルで登頂予定だったのだが・・・

というのも日本人の場合だと、一般的にみて飛行機の利用者といえば旅行かビジネスぐら れている途中でここにいる・・そんなふうに思えてしまう。 いだろうが、 ランジット客の中には、 彼等の服装、全体のイメージからすると『不法労働』とやらで、 目 つきの悪そうな東南アジア系(失礼)の 人がたくさん 強制送還さ

『外見だけでこんな判断をしては非常に失礼であるが・・』

それにロビー内の掃除をしている女性なんかは、 とはいえ見知らぬ国への一人旅、 などと言っている。 開放的気分はトラブルの原因にもなりかねない オレのそばに突然寄ってきて「お金をく

とっても暗く、 日 本では考えられないことだ。 そして不安を抱かせる様なものばかりだ。 加えて、 空港内の建物、 照明、 流れてい る音楽、 どれを

そんなインドを後にアディスアベ スアベバ空港が最後のトランジットとなる。 バ (エチオピア)

搭乗時間待ちをしている時である。

てアディ

これから乗ろうとしている飛行機のすぐそばに置いてあるたくさん (ここでは乗客の荷物は滑走路に直接置いてあり、 飛行機に乗る前に係員に自分の荷物を の荷物が目に入った。。

ないか! 日成田で預けたオレの青い輪行袋があるでは告げるシステムの様だ) よ~く見てみると昨

れる」思わず心の中で叫んでしまった。こまで来ている。これでキリマンジャロに登「あった!やった!オレも MTB も無事でこ

とが今はもう違う。昨日まで、いや日本では当たり前だったこ

んなことを痛感しているオレであった。とか、昨日日本を離れたばかりなのにもうそり前』ということがどんなに重要で大切なこ見知らぬアフリカへの一人旅に『順調、当

きたせいか、この飛行機に乗っているスチュ目前のせいか、はたまた MTB の無事を確認でついに最後の飛行機に乗る。 タンザニアが



最後のトランジットはアディスアベバ空港。オイラの荷物はなんと滑走路に

デスがきれいに愛想良く思えてしまう(笑)

なか優しそうな顔立ちに見えてくるそんなフライトだ。 そしてオレの隣に座っている黒人の乗客は、 一見野性的で怖そうだが、 よく見るとな

ては、 ているポーター、 つまり、ホテルの予約はもちろんの事、キリマンジャロ登頂の予約、 今回のキリマンジャロ登頂計画に関して、山登りに対しての知識と体力的なことについ ある程度準備をしてきたが旅の手配といえばアフリカ往復の航空券ぐらいなもの。 ガイドの予約も全くしていないのである。 登頂時義務づけられ

まして先にも述べたようにオレは英会話は殆どできない。

ないない、「Do you have a room for tonight?」 これを覚えただけでもう話せるつもりになってる純粋な、 かし、 さすがにタンザニアに着けると思うと辞書を取りだし調べ始めるオレ • • ・「よしよし分かった」 いや単純なオレである。 が V

前に進まなくなってしまうものでもある。 たとき一から十まですべてを深く考えこんでしまっては、 今回のキリマンジャロ登頂計画もそうであるが、 人間何かあることをやろうと考えつい できることも、 やりたいことも

「もう少しでタンザニア入り」との機内アナウンスに窓の外に目を向けると、 素晴し V

雲海が一面を埋め尽くしていた。

ている。 るキリマンジャロが山頂だけをわずかに覗かせるして、オレが MTB と一緒に登ろうとしてい

レを包む。

来れたんだ。」「やった!やっとここまで来たんだ、ここまで

も満足げに眺めているのであったよしもなく、その景色をいつまでも、いつまで先、オレにとって大きな問題が起ることを知るかぶ真っ白な雲、そんなタンザニアでこれからどこまでも続くぬけるような青い空、そこに浮

その大自然にふさわしいと言えばふさわしい



遥か彼方にキリマンジャロの頂が・・・

国際空港とはいえないほど貧素だった。。 のだがキリマ ンジャロ国際空港の静けさそしてその規模といったら何だろう。 お世辞でも

現にオレが乗ってきた飛行機からこの空港に降りた客は、 なんと十人はいなかっただろう。

レの不慣れな態度を悟ったのか係員が走り寄ってきてオレのペンを取るなり勝手に書いて しまったのである。 早速入国手続きを行った。 機内で書いていなかった入国カー ・ドを急いで書い ていたらオ

荷物受取の特定の場所など実はどこにもないのだ!オレの大事なあの輪行袋はなんとその 辺にゴロンと転がっている。『エーッ信じられない』 そんな訳で入国手続もスムーズに、『次は、 荷物と・・ 荷物の受取場所は?・

れなかったが偉そうに言っているのだけはオレにも分かる。 い OK』と簡単に思ってたら「荷物を開けろ」と言っているのだろう。 そしていよいよ最後の荷物検査である。ここまでの感じだと『検査』なんてのはなく『は はっきりとは聞き取

(現地の言葉はスワヒリ語だがほとんど英語で会話しているようだった)

そう思いながらも輪行袋のチャックを開ける。

終わるか終わらないかのうちに、その偉そうなオッサンは面倒くさそうに「もうい 寝袋をとりだして「自転車でツーリング、 そしてキャンプをする。」とオレの話が い !

との態度。

べる程ヒマじゃない」そんな顔をしている。「寝袋なんか持ってるへんな日本人の荷物を調

「・・・・・ヤロウ!利用客もほとんどいない「・・・・・ヤロウ!利用客もほとんどいないこと、言いたいことがこれっぽっちも言えないか!」と心のなかで叫ぶオレ。

ってもても来る気配なし)タクシーといってもく?一台のタクシーが来た。(バスはいつまで待たこから今日泊まる予定のモシの街まで約五十ここから今日泊まる予定のモシの街まで約五十

話せない)



ポーターのジャクソンと

目印などないので本物かどうか分からない。

ワソーな風貌だ。 まして運転手は、 パンチパー マ (黒人だから天然のパンチパー マは、 当たり前か?) 0)

正しいかも知れない。 とりあえず、 この車に乗る。 というかうまいこと「乗せられてしまった」と言った方が

案の定、料金メーターなど付いてない。

助手席のドアを開けてくれたが、パンチパ マの運ちゃんの横はぶっそうだ。

11 つ何をされてもすぐ対応できるよう身構えながら後部座席に乗る。

「何処かに連れて行かれたら」と心配しながらも、 ト近くのマラングに泊まることにする。 その運転手との話でキリマンジャロゲ

であった) (彼の話だとモシの街は、 暑くて過ごしにくい とのこと結果的にもマラングは良いところ

悪路を猛スピードでマラングへと向かう。 つ故障しても決して不思議でない古く傷つい たこのタクシ は、 人をかき分けなが

交通マナーを見ればその地域その国の その運転が上手とか下手とか、そんなことより もとにかく危なく、 怖いのである。 レ べ ル

がわかる。

った南米のアルゼンチンをふと思い出した。 十年ほど前に以前勤めていた会社 の出張で行

スの それはアル 街をタクシーに乗って走ってた時のこと ゼンチンの首都ブエノスアイレ

だけになってい 年か後、テレビのクイズ番組で見たそのアルゼ 赤青黄と三つあるはずの信号機のランプがど でもこれで驚いてはいけなかった。 う見ても二つしかない。青と赤だけなのである。 ンチンの信号機は「赤」だけ、 たのである。 つまり「止まれ!」 それから何



この風貌に最初はビビったが実はいいヤツだった(笑)

オレがいた。 マナーに 関してはそれ以上の国タンザニア、そう感じながら後部座席に身を包み込む

約一時間半程 の恐~いドライブを終えパンチ兄ちゃ んお薦めであるバ ピ 口 ン 口 ッジに無事

たいな「宿」である。 ツインルームが十室程、 そして小さなレストラン、 バ がある日本でいうペンション?み

ここで初めてキリマンジャロ 公園への入山手続きをする。

その入山条件の中にガイド一人とポ ーター二人を付けることが義務付けられていた。

あとは当日キリマンジャ 口 \mathcal{O} 登山起点であるマラングゲ トで入山許可証をもらうだけ

いるようだ)

ガイドの手配もこのロ

ッジで行えた

(このロッジで専用のガイドとポーターを雇っ

て

まり食べる気にならず、ビールを飲みながら流し込むように食べる。 本食と変わりはないようだが油が多くかなりベトベトしていて、 メニュー 午後七時食事をとるが、 は、 チキン、ポテト、 今日の宿泊者はなんとオレー人のため寂しい食事となる。 キャベツ、とうもろこし、 それに焼き飯・ 味付けも超薄味なのであ ・といえば日

する。
時三十分である)もあるのでもう寝ることに昨日の睡眠不足と時差(日本ではもう午前一年後七時三十分、あまり眠気は感じないが、

天気あき、ショッジの中庭で日本の支達へポキリマンジャロ登頂開始だ。である。今日一日は休養、明日からいよいよである。今日一日は休養、明日からいよいよである。今日一日は休養、明日からいよいよれ、時差ボケも感じられない。夜中に降っ爽快、時差ボケも感じられない。夜中に降っず、十一月六日(金)年前六時三十分起床。気分

てくる。
天気も良いしロッジの中庭で日本の友達へポストカードを書いていると、ここで働いているとから



る人はほとんどいないのが現状のようである。よってこのロッジでは、 外国からの観光客のための大きなホテルがいくつかあるため、ここバビロンロッジに泊ま ゆとりのある人たちを相手にレストラン、 バーを主として営業しているようだ。 地元の比較的経済

話は元に戻るが、あっと言う間に十人程集まってきたので

「それじゃ、みんなで乾杯しよう!」

とのことで小瓶ビール一本百二十円なり!「よし、みんなにおごっちゃおう」とオレ。 のに、何故こんなにここで働いている人が多いのか不思議だ。 でも、ここのレストラン、そしてバーにしろ日曜日以外の客といったらほとんどいない

でも一つ感じたことは、仕事をはじめ、その他のことになどあまりすることがないよう みんな暇そうに、いや、のんびりと暮らしている。

でもこれで生活していけるならとっても幸せそうな気がする。

昼過ぎ、ここマラングを MTB と一緒に散歩する。 るとてもすばらしい田舎町である。 キリマンジャロ のキボ峰が雲間にみえ

かし散歩途中そんな情景とは似ても似つかない大事故を見てしまったのである。

りて行くではないか!ピードでクラクションを鳴らしながら坂を下と言ったほうがぴったりの表現)バスが猛ス率二百%以上ともいえる(いや、人間積んだ

であろう。 てそのバスの乗客全ての人たち皆そう思ったそのクラクションを鳴らしている運転手そしそのクラクションを鳴らしている運転手そしてこの先、大事故になる」近くにいた人、

衝突してしまったのである。を地面から浮かした状態で左カーブを曲がりを地面から浮かした状態で左カーブを曲がり

しかし、バスの中では多数の重傷者が出ていちは、間一髪で逃れたようだ。幸いにもその大木付近でたむろしていた人た



みんなでビールで乾杯だっ!

た様子だった。

とっさにオレの頭をよぎったもの は、 これは運転マナー が悪いとかそういう問題では

それに加え、 あのタクシーもそうであったように、 あれだけの人、 荷物を積んでの走行では、 このバスも何十年も前のものに違いない。 冷たい言い方かもしれない が、

きて当然であろう出来事のように思えた。 介があった。 ッジに戻ると明日からのキリマンジャロ登頂に同行してくれるガイド 「ロメリ氏」 の紹

年齢は二十五歳、身長はあまり高くないが、ガッチリとした体格無口なアフリカンである。 ってもらえ。 いろいろ話をしているとジョシアがオレに向かって「自転車とザックは彼 そのロメリ氏とここのロッジのマネージャー、 ジョシア氏とオレの三人で登頂について (ロメリ) に持

といろいろ言ってくれたが、オレはそんな気はこれっぽっちもない 「そして写真を撮るときだけカト -が持て。 特にギルマンズポイント付近は急で大変だ。」 Ļ はっきりと断った。

なことをしてまで登りたいとは思わないし \mathcal{O} 事を大事な観光客として心配してくれてるの 「自分を試す」「自分を見つめ直す」ためにここ かも知れない が、 オレはそんな軟弱

を持っていく気はない。 まで来たのだから、人の力を借りてまで MTB

思うのである。 頑張れるか、どれだけ一生懸命になれるかだとその目的に向かう過程が一番重要!どれだけ「頂上まで行くこと」は最終的な結果であって

まったのである。という日となってしどんよりとした最悪の長~い一日となってして気も良いし、よ~しキリマンジャロ出発だ!気温二十度快晴である。



ッドの上にいる・・・
今は午後八時。予定していたマンダラハットの山小屋ではなく、 モシの YMCA ホテル のべ

のである。 マラングゲ ートで自転車持ち込みの許可がもらえずキリマンジャロにはまだ登って 11 な

らえなかったのである。 オレの片言英語そして日本から持ってきたワープロで作った入山許可願い は受け入れても

返事は変わらなかった。 時間以上の話し合いの末、 初めて経験する"土下座"までしたがマラングゲ 0 係員の

でもあきらめなかった。いや、あきらめられなかった。

そこで所長と話すことになったのである。 結局ここマラングゲートでは話し合いが つかず、ナショナル パークのオフィスに行って、

さらに土、日曜日は休館とのこと。 しかしながら、そのオフィスとやらはここから約百五十キロも離れたアル シャにあり、

のだ。 かくしてオレはその土日曜日を利用してモシの街まで MTB ツ リングをすることにした

下がっていたに違いない。でも今までのオレであったらあのままあっさりと引き

だ。そう簡単には引き下がれない。このキリマンジャロに賭け、自分を試しにも来ているの、オーバーかもしれないがオレなりにオレのすべてを

ち込み許可」をもらえなかった自分に腹が立ち、 自分なりの目標を持ち、時間とそして費用もなんとか工 が悪いとかそういう意味ではないが) そうになった。 金持ち してここまで進んできたんだ。そう思うと「自転車持 るのとは訳が違う。 \mathcal{O} 日本人が団体でにアフリカ (金持ちが嫌い とか \mathcal{O} 観光旅行に 観光旅行 涙が出 来



マサイ族の使ってたナタ?もここアルーシャの土産屋で買った

本来今いるここのホテルには、 でないため悶々とした欲求を抱きながら MTB で走って来たのだった。 キリマ ・ンジャ 口登頂後に泊まるつもりだったが、 入山許

住む人のほとんどが しまうのである。 マラングからここの \mathcal{O} モシという町まで約六十キロ程だがその んびりと暮らしているようで、 オレが行く所にはすぐ人垣ができて 間、前にも述べたがここに

写真撮影中に人が来れない場所を第一に探さなくてはならない そうなると「キリマンジャロが良く見える、 魔にもなり兼ねないし、又オレのたくさんの荷物や MTB の盗難のことも心配になってくる。 特に写真を撮る時などは、一苦労である。 構図がいい」なんて言うのは二の次になる。 もの珍しげに集まって来る人達は、 撮影の

上げ状態になる。 んと本日二度目の などと思っていたらなんとマラングを出発して二十キロ程走った所、 パンク発生!すでにスペアチューブとパンク修理キットは使いきり)お手 ヒモ(地名)付近でな

のまま行くか迷いながらもペダリングは続い 「あ~どうしょう。 今日 泊まる予定のモシ の町まではまだ四十キロはある」 てい 戻ろうか、

かぶ。 のパ ンチパ と同時にそれらしき暑さがジワジワと感じる マの 兄ちゃ W \mathcal{O} 「モシの 町はとても暑く過ごしにくい」 その言葉が頭に

そしてそんなオレの事を珍しがり追いかけて来る子供より遅いパンクしたまま走るオレ

MTB°

ク修理」をすることに決める。何度かの休憩後、仕方なしに「ワラ詰めパン

に近づける方法である。なものでも詰め込んで空気の入っている状態にれは最終的に行う修理でタイヤの中にどん

のが欠点である(笑) 片寄りしてしまい思う様に走行できなくなる処方法は走って行くうちに詰め込んだものが枯れ草を集めてもらう。しかしこのパンク対

てず、ついに MTB 走行を断念する。暑さと砂利石を敷き詰めた様な舗装路?は"パンク修理の達人 K.KATO の必殺技もこの

まいと思っていたがどうやら乗らねばなら例の事故を見て以来、絶対にバスには乗る



2度目のパンクで修理キットもなくなりタイヤにワラを詰める作戦に

ぬ時が来てしまったようだ。

所にたどり着いた。 バス停のカンバンなど何処にも見あたらないが、 バスを待っていると思われる人がいる

しかしバスはなかなか来ない。 やっと来てもどういう訳か停まらず走り去ってし

そうヒッチハイクである。 いるのをよく見かけたが、 そうこうしていると同じくバスを待っていたうちのひとりの女性が、 (そう言えばトラックの荷台にこぼれるくらい人を乗せて走って あれは特定の人を載せているのではなくヒッチハイクだったの トラックを止めた。

をトラックに載せるのを手伝ってくれたのであった。 トラックを止めたその女性はオレにも「乗りなさい」と。 そして一緒にいた青年もM $_{\rm B}^{\rm T}$

のオレが振り落とさなければ。」の話だが。 「やった!これでモシの町までたどり着ける?猛スピ K のこの荷台からMTBそしてこ

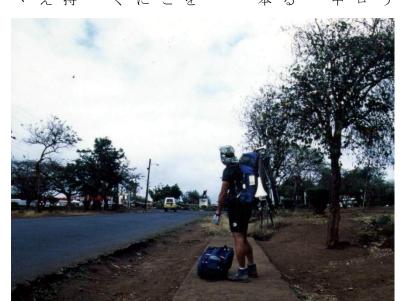
していて少し緊迫感がある。そんな中モシの町。こわそーなお兄さんがウロウロをくの田舎だったマラングとは少し違う

YMCA・HOTEL を探したどり着く。

人が宿泊していたのである。と、聞きなれた言葉が耳をかすめる。日本受付を済ませフロアでビールを飲んでいる

話してくれた。 持ち越しです」とがっかりした様子もなくと。「しかし入学の許可はもらえず、来年に連れてのこの国の大学に留学に来たとのこ連組出身の照屋さん(三十歳位)は奥さんを

てもらうこととなる。夜遅くまで考えてくち込み許可」についての英文を彼らに教えその後オレの「キリマンジャロ自転車持



バスを待つ・これも全て自分撮りだ(笑)

ろうか!「愛する人と二人で共感し、 感は聞けなかったがこちらの大学に留学してまで、 っぴりうらやましかったりもした。 そして食事までご馳走してくれた。とても親切にしてくれた照屋夫妻、 それに向かって一緒に進んで行く」そんな彼らがち 彼らは何を求め、 何を夢見ているのだ 彼らの 人生

十一月八日(日)午前六時起床

受ける。 少し暗くぶっそうな感じであったが、 朝食後ここ YMCA をチェックアウト した後少し町を散歩する。 一夜明けた今日は、 一変してさわやかな町の印象を 昨日この町に着いた時は、

自分自身の受け取り方でこうも変わるものだろうか。 明るく親切な気がする。 少なくともオレを含めた日本人より

来る。 の無い 帰路 バス停にて、 バス停にて、いつ来るかわからない(マラングのビバロンロッジへの) つ来るかわからない バスを待つこと一時間。やっとのことでバスがは時間的にもバスで例により停留所のカンバン

ここでは当たり前 の事なのか、 「行先表示」 なんていうのはバスのどこを探しても見当たら

走って来るバスのドアを開けながら車掌らしき男が大声で叫んでいる

M A R A N G !

オレも思わず聞き返す「マラング?」

れ程違和感もなく不安もすぐ消えた。仕方なしに乗る。しかし乗ってしまうとそ乗りたくなかったバスにおそるおそる

の中、バスの中央に移動し身を構える(笑)でも衝突転倒に備えてギュウギュウ詰め

バビロンロッジの車で移動。の許可を受けるべく約百五十キロの道を務所で「キリマンジャロ自転車持ち込み」キー月九日(月)午前六時三十分起床

なく続いているのだが所々に水の入ったその途中草原の中を一本の道が果てし



水の入ったポリタンクを積んだ自転車がいたるところに

ポリタンクを持った男がいた。

給する水を売っているのである。 「何をしているのか?」不思議に思っていたがすぐ答えは解った。 なんとラジエター

オレの乗った車も当然のように途中幾度かその男たちの世話になり無事アル

ていた。 アルーシャ の街には、 今までのタンザニアでは考えられない程の巨大なビルがそびえ立っ

国立公園管理事務所を目の前にして、オレは興奮と緊張感に身を包まれていた。

[I love bicycle ,the bicycle in my life!]

 $\lceil N_0 \cdot \cdot \cdot \cdot \cdot \text{KATO} \cdot \cdot \cdot \cdot \rceil$

もしかしたらこれが、 全てはうまく行くことのないこれが、 人生かもしれない

複雑な気持ちと共に国立公園事務所を後にする。

ていたが正直なところ足取りは重かった。 キリマンジャロへの自転車持ち込み許可がもらえなくても潔くそれに応じようと心に決め

ならないのだ。 かし今あるのは 「キリマンジャロ へ自転車は持ち込めない」 という現実のみ。

十一月十日(火) 午前六時三十分起床 晴れ

MTB と一緒に登れないのは残念だがいよい よ今日からキリマンジャロに登るのである。 まっこで入山届けと登山者名簿に記入する。ミ ここで入山届けと登山者名簿に記入する。ミ ここで入山届けと登山者名簿に記入する。ミ ここで入山届けと登山者名簿に記入する。ミ

今日はマラングゲート(標高千五百五十m)から登り下りをするもの。そしてガイドー人ポータ登り下りをするもの。そしてガイド一人ポーター二人付きは入山の決まり事だ。



九時四十九分である。

マランダハット(二千七百m)までの三時間の行程であった。

たのである。 途中ポーターのジャクソン、 ガイドのロメリの2人が遅れて姿が見えなくなってしまっ

心配をしてしまう。 「もしやしてオレ の預けた荷物の中身を開け何か盗んでいるのでは・ ・」なんていろい

疑いたくはないがなかなか信用はできない。 もないのが現実である。 でもこんな山の中で何をされてもどうしよう

でもやはり彼らを信用するしかない。

する事はとっても抵抗のあることだ。 かし自転車を背負っていない今のオレにとって自分の荷物をポーターに預けて山登り

確かにオレは彼らにお金を払い、又彼らはそれを仕事とし生活をしている。 っているのではあるがオレの性分には合わない。 うまく成り立

やはり自分の荷物は自分で持ち自分の事は自分でする、これが基本だと思う。

そんなことを考えて歩いていると先程彼らを疑った自分が恥ずかしくなってきた。

今朝は二十度とちょっとひんやりしていたが今午前十一時では二十七度となり汗ばむ程

の良い天気である。

十数名しか記入されてなかった。 確かに登山者をほとんど見かけない。 ここの登山者は十月が一番多いらしく十一月になるとその数は急に少なくなるらしい。 そういえばマラングゲー トの 登山者名簿にも今日は

途中二回 この大自然の中に溶け込むにはできるだけ人は少ない方がいいようだ。 の休憩(やはりポ ーターは荷物が多くしんどそうだ)後、マンダラハットに到着

四人部屋が二つ山小屋が十軒程、 そこには十人程のアメリカ人が日光浴をしていた。どうやら団体で来ているようだ。 小屋に案内された。 森を切り開いた中にあるそのひとつの No1 と書かれた山

ここからは青い空と白い雲だけしか見えないがそれだけでも十分過ぎるくらいの気持ち良 いところである。

おっとお昼ご飯がまだであった。 ここでは二人のポ タ がそれを用意をしてくれ

でもある。 お世話をし そしてキリマンジャロ登頂回数は二五回とのこと。 てくれる彼らを紹介しておこう。ポール氏は二十一才でなんと二児の 父親

ここに日本を出発する前に友達が寄せ書きをしてくれたウォーターボトルがある。 持ち主で登頂回数は十五回。そしてガイドのロメリがいる。 もうひとりのポーター、ジャクソン氏は二十才。身長 19ocm で非常におとなし 11 性格 \mathcal{O}

ばかり先行しているオレにとってはズキンと胸に突き刺さる程の強い言葉であった。 その中の中尾さんの「人生、口では語られない。その体に刻んで帰ってこい」は日 らの寄せ書きが登山中どれだけ励みになったことか。 \Box

でいるのだろうが入手できればそれはそれで何でも良い様だ。 というのはここで何をするにもチップを要求されるのである。彼らは第一番に又別の意味でだがステッカーテッシュペーパーなども予想以上に役に立った。 彼らは第一番に金銭を望ん

五~六才の子供もまれではない。 今日明日を生きるために老若男女問 わずみんな真剣なの

そのためには小さな子供までが我々のような観光客相手に金銭を要求してくるのである。 も英語で話し かけてくる。 「生きる」 ためにである。

が覚めてしまった。 昨夜は九時ぐらいに寝てしまったので早く目 十一月十一日 (水)午前六時起床

安にさせる程のものだ。り続いて登頂できなくなるのでは・・・」と不りが、屋根を叩き付ける雨音は「このまま降ようだ。屋根を叩き付ける雨音は「このまま降

ツと豪華メニューである。かゆ?、エッグ、紅茶それにステーキとフルー山小屋の朝食は次の通りだ。食パン二切れにお

が風が吹くと肌寒い。標高三千mを越えるとさ現在午前十一時十分気温十五度、晴れてはいるボハットまでである。

すがに登り坂では息が荒くなる。

平地だと早足



五時間の道のりであった。 午前八時に出発して、午後一時にここホロンボハットに到着。 でもなんともないのだが登りになるとゆっくりゆっくり歩かないとだめだ。 パンフォレット記載通り約

ころだったのでその紅茶を何杯もガブ飲みする。 でもちょっと疲れたのか山小屋に着くとすぐ三十分程寝てしまった。足音で目覚めると ロメリが暖かい紅茶を手にベッドの横に立っていた。ちょうど喉が乾いていたと

それは軽い高山病なのか、 山小屋から外を見ると霧が出ている。 頭痛そして少し頬が熱い。 と同時にオレ の頭の中も少し曇ってきたみたいだ。 まだ陽が高いのに外に出る気も起こ

ふと思い出す、平和すぎる日本のことを。

ここは言葉が違うのは当然の事だが医療の整った病院もなく、 いとは言えない。 交通事情も悪く又治安も良

こんなことはそう何度も経験できることではないだろう。 そんな中に日本人がポツンとひとり、それも町から遠く離れたキリマンジャロ \mathcal{O} 山小屋に。

タンザニアに来て今日で約一週間、 言葉では言い表せない多くのものを得たような気がす

十一月十二日(木)起床時間不明 晴れ キリマンジャロ頂上まではほど遠いこのホロンボハットでこんなにも高山病に悩まされるなんてこれから先がとても不安だ。 を一晩で 2 リットル程ガブ飲みする。 たっ 晩で 2 リットル程ガブ飲みする。 で が あっても誰にも助けを呼ぶこともできない」など少し不安な一夜を過ごした。 い」など少し不安な一夜を過ごした。 い」など少し不安な一夜を過ごした。 た記憶があるので少しは寝たのだろうか?。 た記憶があるので少しは寝たのだろうか?。

かできない。でもガイド、ポーターは全く平気ているが何をするにもゆっくりとした動きしくは午前7時四十五分、動悸微熱はおさまっ



高山病で顔そして手のむくみがひどくなってきた

今日は午前八時三十分出発、五時間四十分のゆっくりペース(登山案内では五時間 でもなんとかキボハット(四千七百三m)までたどり着くことが出来た。 で午後一時四十分着。 他の登山者はどうなんだろう、 見る限りではみんな元気そうである。 この表示)

間にか寝てしまったが気分が、悪く目が覚めたとたんいきなりおう吐した。 しか 運良くほとんど食べ物を口にしていなかったせいか一回だけですんだ。 .病になり一度刃吐くと食べたものすべて、そして血まで吐いてしまうとの事らしい しとにかく体がだるい。 とりあえず山小屋のベッドに横たえる。 昨日同様 つの が

今夜を乗り切ればあとはなんとか気力で登れそうである。 激しく感じ、 それよりも本当にオレ そして訳のわからない不思議な夢を見るそんな夜がとても不安である。 の体は大丈夫なのだろうか。 昨夜もそうであったが動悸がとても でも

十一月十三日(金)

コンコン! コンコン!ドアのノックの音が響く。

「OK」「OK」と返事は言えでき意識は はっきりしているが体が全く動かない。 十分程して

りる。からかやっと起き上がり、ゆっくりと身支度を

る予定だ。 今日は登頂その後はホロ たオンザゴー 紅茶とビスケ メ ヘット、ノリが田 を無理矢理口に押し込める。 用意してく そして日本から持って行 ンボ ハ れ たあ ットまで下 っった から Щ す つい

に変わっていた。 年前の時四十五分出発、不安であった夜はなん年前の時四十五分出発、不安であった夜はなん

らしい
に見えるのだが五時間ほどかかる
ここキボハットからギルマンズポイントまでは



辛い時の方が絵になる(笑)これも自分撮り

らは高低差約千mをジグザグに登るのである。 ラングゲー を出て昨日までの三日間はなだらかな上り坂であったがここキボ ハ ツ か

時計を見たであろう。 砂混じりの急斜面は弱った体を更に疲れさせる。 時 間 の経過がとても遅い 先程か 5

過ぎれば自動的に上に行ける、 というのも 一歩一歩登っているのである。 「五時間でギル マンズポ ギルマンズポイント 1 ント に」が 頭 に着ける」と心のどこかで思いながら の中にあるため 「時間がたてば 五時

が寒さなど感じない。 ているのだから無理もないのかも知れないが頭の中はボーッとしてい 一歩前に上に進むことだけを考えて歩く。真夜中に起きて標高五千m以上もの所を歩 て氷点下のはずだ

 \bar{o} n m i n u t e が 口癖の様に出る。 そして何度も何度も休

体が思う様に動かない。 むと呼吸が急に荒くなる。 休憩回数を少なくして呼吸を整えてゆ 0 くり 歩きたい \mathcal{O} だが

ロメリに小さく叫ぶ ロメ 、 リ は 「あそこまで行ってから」 \bar{o} n e m i n u t е オレ の下手な英語でも十分だ。

指を差す。

長い長い五時間だった。 うっすらと夜が明けてくる。 それを断る元気もなく言われたままにするオレ。そんなことを幾度となく繰り返す。 そしてやっとギルマンズポイントだ。 あまりにも長かっ

とんどの登山者は高山病などのためこのギルマンズポイント五六八五 現在五時五十分、 予定通りの時間である。 「で、こここからが勝負だ」 mを終点とするらし と言い聞かせる。

もちろんここも頂上の ひとつとして認めら れて いる場所ではあるが

と決めていた事である。 でもこの先にあるウフルピーク五千八百九十五 m は日本を出発する時から 「必ず登るん

自転車を連れて来れなか 0 た事もあってかここで終えるつもりはこれ っぽ っちもなか

ルピークを目指す。 そしてどこからか力が湧いてくるのを感じるのであった。 気合が入り休憩もせず、 ウフ

ここからは急な上りは少なく、三百m程の高低差を登る。

て登山道は次第に雪道となる。 ふと脇に目をやるとなんとあちこちに氷 河 が

ているではない か。 写真を撮りたいが正直なところそんな元気はない

「頂上はもうすぐなのか?」心身共限界を越えた?頃のことである。

なんと過去二十五回もこのキリマンジャロを登っているベテランガイド、 が荒いのだ。 口 メ IJ \mathcal{O} 息づ

いるのである。 そしてマラングゲー トからここまで自ら休むことをしなかった彼がなんと疲れて休ん

オレは一眼レフカメラに三脚、 それに比べ彼は何ひとつ持ってない 食料そしてウォターボトルその他たくさんの荷物を持っ のにである。

戻す。 そんな彼を横目に頂上目指 って不要に変えら 氷河も朝陽もきれいに感じることができてしまう。 うれない のである。苦しいのはオレだけじゃないと思うと少し元気をとり して歩き去るオレ。 ここまで来ると自分の \sim] スが出来てしま

ギルマンズポイントから一時間。 ついにウフル ر ا クにたどり着くことができたのである。 「ここまで来た。 ここまで来れた。 て 0 $\stackrel{\circ}{\sim}$ んまで来たぞオ

あえず写真を撮る。 頭のせ か正直なところうれしさは思っ そしてたくさん の小石をジャンパーの たほどではなか ポケ 0 ットに詰め込む。

さっきからずーっと座ったままである。らまねたもの)それにしてもガイドのロメリはは植村直己が山頂の石を記念にしている事か

うだ)
していた。(どうよら高山病も頂点に達したよメモ書きするオレの手のツメは真っ白く変色のの間にか凍りついている。そして行程記録をつの間にか凍りついている。そして行程記録を

下山すればその症状は治るとのこと。でも心配はいらない、重度の高山病でない限り

着いてしまった。のに帰りはなんと2時間余りでキボハットに先程まで六時間もかけて必死で登って来た

ここキボハットで朝食となる。まだ午前八時四



高山病にもなりながらなんとか頂上へ

ファンタオレンジを一口飲むのが精一杯であった。 でも相変わらず食欲は無くせっかく彼らが用意してくれた食事を口にすることはできず、 する。それが彼らの役目(仕事)らしい。 ポーターの二人ポール、ジャクソンは我々とウフルピークには同行せずここで朝食を用意 十分、これがホントの朝飯前だ!。

ここから先は下山するだけである。登って来る時とは似ても似つかぬ早足で歩く。 に泊まったマランダハットまで下りてしまった。ここに着いたのが夕方であるからなんと ロメリ、ポール、 今日は十四時間以上五十km程歩いたことになる。 今日の宿泊予定はホロンボハットであったが比較的元気なオレの足取りを見てか一日目 ジャクソンそしてオレの四人、まるで競歩でもしているかのようだ。

これもあの六甲全山縦走のお陰と感謝する。

十一月十四日(土)午前六時四十分起床 晴れ

ゲートに到着。まだ午前九時四十分だ。 こんなに疲れたのは初めてだ。もうここまで下りて来たので高山病の症状はほとんどない 体のエネルギーを全て使い切ったような気がする。 今日は二時間余りを歩きマラング

ここで登頂認定書なるものをもらう。 少しづつ登頂の実感が湧いて来る。

かう。 昼過ぎにいろいろとお世話になったバビロンロッジに別れを告げキリマンジャロ空港 フライトは明朝のため今日は空港のロビーでの宿泊だ。

は疲れている。だから今日はアルーシャのホテルに泊まれ。 例のパンチパーマの運ちゃん(名前はガスパー)は、なぜかバビロ アルーシャと空港までは三十kmと近いので名案かもしれない 明日はおれが迎えに行く。 ンロッジに居て、

のもいいが何か でもここでの交通事情は全く当てにできる状態では のトラブルで明朝のフライト時間に遅れるのもバカらしい ない。 ア ル シャの ホテル

空港内のロビーは先日入国した時同様人がほとんどいない。

タンザニアに来て初めてここで冷えたビールを口にする。

が疲労のせい かおいしさも感じられず、そして夕飯も食わず寝ることにする

空港内の ロビ ーのプラスチックの椅子二つがオレの今夜のベッドだ。

である。 そんなことよりも気になったの は ブーンと元気良くオレの回りを飛び回っ て V る二匹

だがその話を聞いてからはとても神経質になってしまった。で最後の最後にこの二匹の 今までは「もともと蚊に刺されない体質だし、そんなの気にならない!」と思っていたの 本から来た青年協力隊のひとりが最近蚊に刺されマラリア病で命を落としたとのこと。 当然クーラーなど無いこのロビーだが蚊を逃れるためシュラフにもぐり込む。

十一月十五日 (日)午前六時起床 晴れ

(国外持ち出し禁止) が見つかってしまい「全て土産品に変えろ」とのこと。 して間もなく搭乗手続きそしてチェックインである。 隠しておいたタンザニアマ ネ

木を刈る時に使う小刀(刃渡り35c だがアルーシャで買ったマサイ族がほんとうに使っていたヤリ ずにすんだ。 $\underbrace{\mathbf{m}}$ は自転車と一緒に輪行袋に入れていたので没収 (刃渡り80 c m) と草

日後のフライトとなってしまう。 今日は インドのボ ンベイまで。 ボ ン ベ 1 から成田までは空席が無い と次 \mathcal{O} 便、 な

でもなんとか予定通りの飛行機に乗ることができ無事成田に着く そう思うと二週間も店(自転車店) を閉めてい るのでそのことが気がかりとなっ (十一月1六日午後十時

三十分

らず何かを終えた後に入るお風呂は最高である。 この日は成田空港から一時間ほどのところに住んでいる姉の家に泊まる。大小にかかわ

「このためにしている」といっても過言ではないくらい疲れた心をいやしてくれる。

だ。 がする・・・ 「キリマンジャロ山頂に自転車を持って行けなかったこと」は現実としてオレの能力不足 でも今となってみればそれは目標のひとつであってもっと大切なものを得たような気

たった二週間の旅 ・・・でもこんない凝縮した日々

これからの人生もこうありたい!と痛感するのであった・・・。

九十二年 写真·文 K.KATO

タンザニア物語